
復興公営住宅におけるコミュニティ づくりー何が大事なのか

(公財) トヨタ財団「復興公営住宅におけるコミュニティづくり」プログラムメモ

(公財) トヨタ財団 本多 史朗

はじめに

(公財)トヨタ財団では、過去2年間に亘って、東日本大震災被災地各地における、復興公営住宅におけるコミュニティづくりに対する助成を行ってきました。その結果、わかってきたことを、今回は皆さまに共有したいと考えます。要点は、次の3つです。

- ・ 東日本大震災被災地におけるコミュニティとは？
- ・ 具体的なモデルとなる復興公営住宅におけるコミュニティ
- ・ 何が、復興公営住宅におけるコミュニティを促したのか？

それぞれについて説明を加えていきます。

東日本大震災被災地におけるコミュニティとは—伝統的な契約講や講中

復興公営住宅におけるコミュニティを行う以上、そのコミュニティがどのようなものかを考えておかなければなりません。その為には、東北の伝統的な地場のコミュニティである契約講や講中¹を見る必要があります。

この契約講や講中の特徴は、次のように整理することができます。

話し合い

- ・ 年間を通じての祭礼、会合を通じてのメンバー間の話し合い

一緒に汗をかく

- ・ 葬式、道路の建設、簡易水道の敷設...

何ものかを共有する

- ・ 氏神のようなシンボル、山林などの経済的な資産

一言で言えば、世代を超えて、生き残るために、話し合い、一緒に汗をかき、何かを共有していくというのが、契約講や講中≡コミュニティの姿です。そして、復興公営住宅におけるコミュニティの理念的な目標となるでしょう。

しかし、このような完璧な復興公営住宅におけるコミュニティは被災地のどこに行っても存在していません。というのは、制約するものが多くあるからです。その代表的なものが、次の2点です。

復興公営住宅の構造

¹ 一言で言えば、お寺や神社の檀家・氏子集団です。契約講に関しては、東北学院大学地域共生推進機構の本間照雄先生が編まれた「長清水の歩んできた道—一人々の暮らしの記憶」（宮城県サポートセンター支援事務所発行 2016年）をご覧ください。



典型的な復興公営住宅の敷地。申し訳程度のベンチ、そして緑がほとんどない。声がよく響き、人間関係にも亀裂が…

が、生き残って、復興公営住宅にそのまま入居してくる、こんな場合は難しくありません。ところが、多くの場合、このような伝統的なコミュニティは、仮設住宅から復興公営住宅に入居してくる間に、抽選や移動で壊れていきます。その結果、復興公営住宅の入居者を見ると、ほとんどが、あちこちの地域からいらっしゃった、いわば寄せ集めの状態です。後でも触れますが、このような復興公営住宅の中に入っても、入居者のお互いの間の挨拶がないので、すぐにわかります。この更地の状況から、コミュニティづくりをするのは、決して容易ではありません。このような制約がある以上、ある程度以上は、コミュニティづくりは進まない筈です。要は、高望みをしないことです。私がこの事を強調するのは、高い目標を掲げて、急いでコミュニティづくりをやらうとする人は、大体において、途中でくたびれてしまうからです。現実的に目標を設定して、ぼちぼちと進んでいくことが重要です。

現実的な目標となる復興公営住宅コミュニティ

上の点を踏まえて、それでは、現実的な目標となる復興公営住宅コミュニティのモデルはどこかとなると、私が被災各地を回った限りにおいては、次の二つを挙げます。宮城県石巻市にある新立野第二復興住宅であり、ついで岩手県釜石市の上中島Ⅰ期復興住宅です。この二つの住宅を見ると、

これは、もうみなさんが、実際の復興公営住宅に入られてみるとすぐにお解りになると思います。中層の集合住宅で、高齢者にとっては、気楽にあけることが難しい、重たい鉄の扉がある。そして、敷地の中も、殺風景。緑がないために、お喋りをする声が、コンクリートに反射して、敷地内に響き渡ってしまう。このため、寛いでの立ち話も難しい。申し訳程度にベンチが置いてあっても、遮蔽物がない。中に入ってしまうと、出るのが億劫になる、そんな構造です。

シャッフルされてしまった人間関係

先に、被災地の伝統的なコミュニティである契約講や講中について触れました。これら



岩手県のある復興住宅内部の共用スペース。がらんとしており、行きかう入居者の間には挨拶がない。寒々としている。

共通の特徴があります。それは、敷地内部の共用スペースに、よく手入れのされた花壇や菜園が作られているということです。下は、新立野第二と上中島Ⅰ期のそれぞれの共用スペースです。花壇あるいは菜園となっております。両自治会の増田敬自治会長、小沢喜久男自治会長が、入居者の方々を巻き込み、手をかけて作られたものです。



宮城県石巻市新立野第二復興住宅の共用スペース

これが、どれだけすごい事なのかというのは、この反対の実例を見るとよくわかります。それについても、触れてみましょう。



岩手県釜石市上中島Ⅰ期復興住宅の共用スペース

反対の実例—雑草に呑み込まれる共用スペース

反対の実例:宮城県内の、ある復興公営住宅の共用スペース⇒雑草に呑み込まれている



左の写真は、宮城県内の、ある復興公営住宅の共用スペースです。完全に、雑草に呑み込まれてしまっています。蚊も飛び回っています。実は、この雑草の海の中には、散歩道が作られているのですが、それも、この状態ではとても散歩をするという訳にはいきません。その状態を示すのが、次頁の写真です。関係者によると、この復興公営住宅においても、徐々に自治会活動が動き始めているということでしたが、おそらくその中で重要な課題が、この共用スペースのきちんとした管理となるでしょう。これだけの広さの共用スペースを雑草の海にしないためには、定期的な草むしり、草刈りをするか、あるいは除草剤をまくか、一長一短のある選択肢を入居者の方々の中で話し合い、その次には、一緒に汗をかく必要が出てきます。



散歩道が雑草の中に呑み込まれている

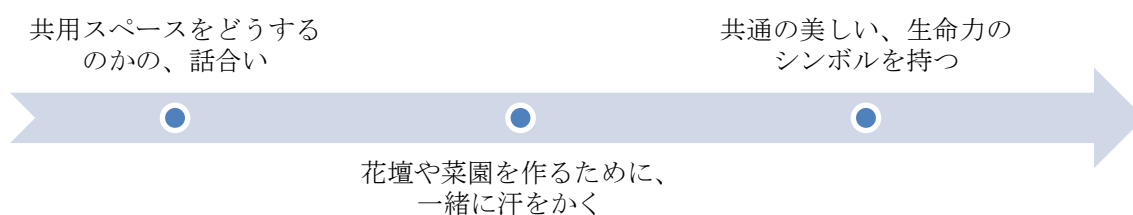
共用スペースを、この復興公営住宅のような状態にさせない、それだけでもコミュニティの力が必要になります。それが、更に、新立野第二、上中島Ⅰ期復興住宅のように、花壇のように美しい空間、あるいは菜園のような、入居者の方々の暮らしに直結するような生命力のある空間にするというのは、大きい事です。新立野第二、上中島Ⅰ期の両自治会長とその周りの入居者の方々が費やしたエネルギーの大きさがしみじみとわかります。

付け加えますと、共用スペースを管理できない復興公営住宅を回ると、大体、内部がしーんとしています。入居者のお互いの間の挨拶が少ないのです。その結果、入居者の表情にも硬さが付きまといまいます。その反面ですが、新立野第二、上中島Ⅰ期のような復興住宅では、挨拶が交わされ、入居者の方の表情も柔らかいのです。これも、話し合い、一緒に汗をかいた結果です。

何がこのような復興公営住宅におけるコミュニティづくりを促したのか

新立野第二、上中島Ⅰ期がやったことの整理

ここから、少し抽象度を上げます。ご容赦ください。これは、新立野第二、上中島Ⅰ期の両自治会長とその周りの人々が行われたことをわかりやすく整理するためです。下の図をご覧ください。



説明すると次のようになります。

1. ほっておくと雑草だらけになる、共用スペースをどう使うか、という課題を入居者の中で話し合う
2. そして、土の入れ替え—復興公営住宅の敷地の土の質は悪いので、培養土などに入れ替える必要がある—、水撒き、草むしりなど、一緒に汗をかく
3. 花壇や菜園を共有する＝自分たちの住まいであるという帰属意識、周囲の人に対して誇れるシンボルが持てる

これが、先に述べた、共用スペースが雑草に飲みこまれた復興公営住宅のような例となると、次のような流れになるでしょう。話し合いもなく⇒一緒に汗をかくこともない⇒その結果、マイナス

の意味しかない共用スペースが復興公営住宅の敷地に出来上がってしまった… それでは、何が、この良い流れを作り出したのでしょうか。私が見ると、次の2つのポイントが重要です。

自治会長のリーダーシップ

現れ方は、当然違いますが、増田・小沢両会長のリーダーシップの取り方には共通の点があります。それをざっくりと整理すると次の通りです。

- ・ コミュニケーションが苦にならない⇒増田会長は、聞き上手。小沢会長は話し上手という違いはありますが、お二人ともさまざまな人がいる入居者との間のコミュニケーションを苦にされません。お二人とも、入居者の方々の名前と顔をほぼ一致させています。次の項目とも関連しますが、女性の入居者の方々から、お二人とも親しまれているのは、明らかにこのコミュニケーションの上手さのおかげです。付け加えると、お二人ともいつも笑顔です。
- ・ 「住みやすい生活」、「良い生活」というもののイメージがはっきりとある⇒元々は殺風景だった復興公営住宅を、住みやすい場所、良い場所に変える。その為にも、共用スペースに、花を植え、野菜を植え、花壇と菜園を作る。このイメージがお二人にはあります。



増田敬会長

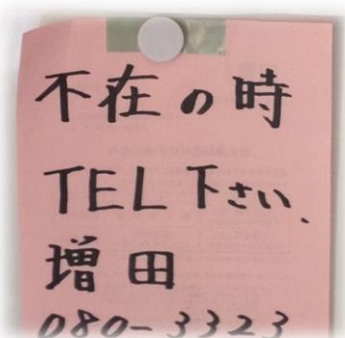


(特活) カリタス釜石が実施した資生堂「生き生き美容教室」での参加者の笑顔—左は、上中島I期小沢自治会長夫人。この催しは、女性入居者間のコミュニケーションを促す効果がある。

ん。

新立野第二復興住宅付設の集会所を伺うと、驚きます。その扉に鍵がかかっておらず一鍵をかけないのは、通常、責任をとりたくない、管理人タイプは嫌がります—、内部に入ると、増田会長の携帯番号が掲示されています。これも、ややこしい話を持ち込まれるのではないかと管理人タイ

- ・ 「管理人」にはなっていない⇒復興公営住宅自治会長でしばしば見かける類型は、ただの「管理人」になることです。規則を重視する役所や会社の中に埋没した人生を送ってきた方が多いようにお見受けします。「規則では、こうなっているから、集会所は、その目的以外のためには使わないでくれ」。あるいは、入居者が花壇を自室の前に作ると、「市役所の住宅課の許可をとらないで、こういうものを作らないでほしい」という注文をつける。こういう規則重視の「管理人」になるのは、とても楽な事です。しかし、これではコミュニティは出来上がりませ



新立野第二復興住宅の集会所に掲示されている増田会長の携帯番号。

プは好まないでしょう。いずれにせよ、これを見ると、増田会長のリーダーシップのスタイルが、管理的なものではないことを鮮やかに示しています。

付け加えると、増田会長（あるいは、小澤会長）は、ほっとくと重箱の隅をつついてくる市役所（行政）の担当者とも、あるいは何かとクレームをつけたがるような入居者とうまく話しあいながら、上のような事柄を進めていかれます。増田会長がおっしゃった「最も敵対的な意見を持っている人は、話を聞いて、よく話し合うと、最も味方をしてくれる人だ」というお言葉には、味わうべきものがあります。

女性入居者のエネルギー

同じく重要なのが、自分が住む復興公営住宅を美しいものにしたい、快適なものにしたいと願う女性入居者の方々のエネルギーです。例えば、次のような場面で、そのエネルギーが表に出てきます。いずれも細部なのですが、復興公営住宅の日常の暮らしを生き生きとしたものにするためには、欠かすことができない活動です。私たち男性には、なかなかできない働きと気働きを感じます。

- ・ 茶話会の時に、料理を一品持ち寄ってくれる
- ・ 敷地の隅に、薔薇を植えようと提案してくれる
- ・ 共用スペースの草むしりを率先して行ってくれる
- ・ 引き籠りがちな入居者の様子をそれとなく伺ってくれる
- ・ アクセサリー作りなどを中心にクラブ活動が始まりやすい

何より重要なのは、何かの活動を行う時でも、男性の側から女性には声をかけにくい面があるのに対して、女性の側から男性の側に声をかける方が簡単なことです。

女性入居者のエネルギーを引き出すきっかけとしての「生き生き美容教室」

若干話が脇に逸れます。この女性のエネルギーを引き出す良いきっかけになるのが、資生堂さんが行っている「生き生き美容教室」です。これは、高齢者を中心とする女性に対して、化粧の基本的なやり方を伝えるセミナーです。その際に、みなが一堂に会して、すっぴんになることから始まってメイクをする体験を共有することが、女性の方々の一体感を作り出すことに繋がります。これをきっかけに、随分と人間関係が深まっていきます。外部の支援団体が主催する際には、4万円＋α、自治会が主催するとなると1万円＋αで開催することができます²。私も、一度オブザーブさせていただきましたが、開始すると数分で、会場の温度が2度ほど上昇したのには圧倒されました。女性の方々の、美しくなりたいという熱意が放射されたためでしょう。

一方、ひとつ、気をつけなければならないのは、この女性入居者の方々のエネルギーは、増田会長や小沢会長のようなリーダーシップの下では、活発に引き出されてきます。が、先に述べたような、「管理人」タイプの自治会長の前では、雲散霧消します。これは、非常にもったいない事です。

² ご関心がある方は、次をご覧ください。「生き生き美容教室」の概要、ならびに、連絡先などの情報が含まれています。<https://www.shiseido.co.jp/lifequality/class/index.html>

おしまい—あるエピソード

最後に、最近、いくつかの復興公営住宅の自治会の幹部クラスの寄合に出席した時のエピソードを引用して、終わりとします。ある復興公営住宅の自治会長-80歳をとうに過ぎた男性です。職人さんだったそうですが、憤然とした表情で語ります。

「折角、私が、敷地内の共用スペースの草むしりを自分でやったのに、そこにわざわざごみをまき散らした入居者がいる。それだけではない。非常階段入口に『立ち入り禁止』という掲示を、私が張り紙したのに、それも破り捨てられている。なんて、非常識な入居者ばかりだ。」と声を大きくした後に、「これから任期が終わるまで、自治会長の仕事なんて、何もやらん。」と言います。

そのお隣に座っているのは、同じ復興公営住宅の自治会副会長の男性です。しかし、こちらの副会長は、会長の怒りに、そっぽを向いています。そのうち、用があるからということで退席しますが、会長に対して何も挨拶がありません。

寄合が引けた後、会長さんがご自分の住まわれている復興公営住宅に帰るので、私はお供



自治会長が手入れをした共用スペース。善意でも、他の入居者とのコミュニケーションがなければ、逆効果に終わる。

をさせていただきました。現場を見たかったので。そして、別の復興公営住宅の役員の人も、一緒となりました。男性で、アクセサリーを作るのが趣味で、話好きの方です。細かな気働きもでき、人当たりも柔らかい。こちらの方の復興公営住宅では、コミュニティづくりが順当に進んでいます。

歩くこと数分、件の復興公営住宅の敷地に入ってみます。何人かの、入居者と思しき方が、中にいますが、誰も会長さんに挨拶をしません。私が、会長さんに、「あの方々は、入居者なのですか」と尋ねると、「良く、わかりません」という

答えが返ってきます。先に帰った副会長さんも、住宅から、偶々出てきましたが、素知らぬ顔をして、会長さんの脇を通り過ぎていきます。

別の復興公営住宅の役員さんが、「会長さん、この復興公営住宅に入居しているのは、20戸ですよね。会長になられてから、この半年の間に、20戸を個別に訪問して、挨拶をされましたか?」と尋ねます。会長さんは、虚を突かれたように、「そんなことはしとらんよ」と答えます。別の役員さんが畳み掛けます。「会長さん、入居者のみなに挨拶して、顔と名前を覚えないと、どうしようもないですよ。そうでない限り、いくら会長さんがお一人で頑張っても、『何か、わけのわからない爺さんが、団地のあちこちで好き勝手なことをやっている。足を引っ張ってやれ。』と思われるのが関の山ですよ。そして、会長さんの方から挨拶しなければ。」

これに対して、会長さんは、黙して答えません。80歳を過ぎた誇り高い男性が、いちいち他の部屋を回って、挨拶をするのは、プライドが許さないのかもしれませんが。こんな時に、行政や支援団体の方が、ずっと手を差し伸べて、会長さんが、それぞれの入居者に挨拶をすることを助けてもらえればと思います。お金は全くかかりません。しかし、その効果は大きなものがある筈です。

(了)